

## 三分詩七分讀

北基行 記

北京 前門建国飯店 梨園劇場

## 三分の詩、七分の讀

詩の良し悪しを点数で評価できないか。こんな質問をよく受けるが、よい回答が見つからない。この答えはあるはずであり、あらねばならない。

蘇東坡が、曾てこの問題に答えたことがある。宋代の周密の書『齊東野語』の記載によると、“昔 詩を以てて東坡に投ずる者あり。之を朗誦し、而して請ひて曰く、此の詩に分数ありや否や。坡曰はく、十分なり。其の人大いに喜ぶ。坡徐に曰く、三分の詩 七分の讀のみ。”

この対話は意味深長である。この男の詩は甚だまずかつたのであろう。だから、朗誦の声調を借りて人の耳をごまかし、詩句の拙さを覆い隠すということだ。ユーモアあふれるこの評語は、蘇東坡の口から、この作詞者の底が浅いことを、面と向かってくさしている。

蘇東坡の評語をベースにそれを発展させれば、この問題の解答が、見つかるのではないか。蘇東坡のこの評語は、現在の新詩の批評にぴったりのように思える。

まず新詩から述べよう。われわれが日常見かける新詩は、声調にたより人気を得たものであるまいか。詩の内容は薄っぺらで、これっぽちの感情もわかない。詩境は浅薄、字句は未洗練である。もともと粗末な散文を、一句一句ちぎり書き、並べかえて新詩形式というから、聞いてあきれる、何の味もない。これを、有名なアナウンサーに朗誦してもらい、それに表情でも加えてもらえば、一部聴衆の拍手喝采をえるかもしれない。残念無念は、面と向かって酷評をくだす蘇東坡流の人物がいなことだ。



蘇軾（そしよく）中国北宋の政治家（1037年1月8日生～1101年8月24日没）蘇東坡（そとうば）とも呼ばれる。

ここで一言説明しておかなければならない。私は、近年多くのよい詩に接してきた、上にのべた悪詩は主流ではない。蘇東坡が批評したのは旧体詩についてである。彼は今日の新体詩あることを予想出来なかつた。この問題解決の糸口を旧体詞詩に探すべきかもしれない。

現在、旧体詞の水準はどうか？ 指導的地位にある数人以外は、状況はかんばしくないといっておこう。人によるが、格律の外れた旧体詞詩が、現在の問題である。それも詩意が浅薄であれば、三分の詩にも至らない。その上に格律が外れるとなると、吟じようにも口に乗らないから、七分の讀もおぼつかないのである。宋代の黄庭堅が王観復の詩を読み、調子があまり悪いので、嘆いて云った、“詩生硬にして、律呂に諧はず。此の病 自是れ讀書いまだ精ならざるのみ。”

これから分かるように旧詞詩は格律を大変重視する。

旧体詞詩の厳格な格律は、人の思想を束縛するので、これを打破し、いまの世にあう格律を打ち立てるという人がある。この主張に反対ではない。新しい格律をもつ詩の創出を主張するものである。だが、新格律を作り出すには、どのように格律を建てるのか、この問題を避けて通れない。ひとまずこれは別問題としよう。新格律がない現在、旧詞詩を詠むことで満足しようという人は、柔順に旧格律に従うことをお勧めする。旧格律は長い歴史を経て、多方面に発展のすえ定型として確立されたのだ。一面、凝固した一種の死んだ枠組みとみなせば、終局的に否定される格律である。別の一面は、人間が詠嘆抒情する時の声調変化を反映する自然法則であり、この法則に従わない作詩は、ごつごつとして、口になじまない。これも事実である。

このように話してきたが、私は旧格律の保護者ではない。また、旧格律を受け入れるよう強制するものではない。私はそのような人間ではない。だれでも自由に新しい格律をつくればよいと思う。けれども、旧律詩、絶句の各種詩牌を使わないことをお勧めする。『滿江紅』という詩牌を用いても、その格律に従わないのであれば、別に新しい詩牌を起こせばよいのだ。例えば『滿江黒』などにして、『滿江紅』と区別することだ。



岳飛（がくひ）中国 南宋の武将（1103年3月24日生～1142年1月27日）滿江紅の著者、毛沢東や秋瑾などの詞に部分的に引用されている。

## 【語句解釈】

・如果, 你用了『滿江紅』的詩牌——詩牌: 詩の題名。

中国詩は、詩文と韻律は一体である。人口に膾炙した詩は、その韻律を応用して別の詩文をあてることがよくある。それに新詩名を付すことができない、最初の詩名で通す約束。ちょうど、“炭鋤節”の替え歌すべてを“炭鋤節”と呼ぶようなもの。

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 『三分詩七分讀』ひとそえ

詩人賈島の話に続いて、鄧拓は詩への造詣の深さを語っています。蘇東坡の批評を引用して中身よりパフォーマンスで勝負する昨今の新体詩詩人の浅薄な姿勢を揶揄して唾棄しています。しかし、真の標的は毛沢東の詩とその人にあるのではないかと感じます。大躍進政策の失敗を自己批判して、第一線を退いたかと思われた毛沢東が経済運営を劉少奇・鄧小平に委ねたあと、思想・政治闘争の仕掛けを画策していた時期にあたるので詩作も政治の色を帯びてきます。

文末の詞調『滿江紅』そして『滿江黒』の皮肉が鍵になりそうです。講読会で北先生から詩作の初歩をご教示願っています。武田泰淳・竹内実の『毛沢東—その詩と人生』（1965）もあります。されど詩は難解であり聴不董・看不董（ちんぷん・かんぷん）ですので、ここでは1963年元旦に郭沫若が作った『滿江紅』と、それに毛沢東が和した詩が文化大革命への決意表明となることを示唆するに留めます。

中国の散髪屋で「七三に分けて」と頼むと「三七分頭だね」と言い直されたことがあります。どうも日本と反対のようです。反対が出ないのが中国の会議のようで、握手・拍手・挙手の為だけに参加していると聞いたことがあります。「三手」と自嘲していました。

井上邦久

## 三分詩七分讀 原文

一首詩の好坏能不能评出分数来呢？许多人问过这个问题，都没有得到明确的答案。然而，这个问题是可以解答的，也应该加以解答。

以前苏东坡曾经解答过这个问题。据宋代周密的《齐东野语》载称：“昔有以诗投东坡者，朗诵之，而请曰：此诗有分数否？坡曰：十分。其人大喜。坡徐曰：三分诗七分读耳。”这几句对话很有意思。看来那个人写的诗很不好，所以要靠朗诵的声调，去影响别人的视听，掩盖诗句本身的缺陷。苏东坡却以幽默的含蓄的评语，当面揭了他的底子。

我们现在谈这个问题，应该从苏东坡的评语中得到什么启发呢？我觉得苏东坡的这个评语，似乎仍然适用于现在的某些诗词作品。

先说新诗吧。我们不是常常见到有一些新诗，几乎全凭朗诵的声调以取胜吗？那些诗本身有的内容十分贫乏，没有什么感情，诗的意境非常浅薄，字句也未经过锤炼；有的简直是把本来就不大好的散文，一句一句地拆开来写，排列成新诗的形式，读起来实在乏味。可是，你如果拿着这样的诗，去请一位高明的演员或播音员，把它朗诵一遍，最好再带上一些表情，那就很可能还会博得一部分听众的掌声。可惜现在没有苏东坡对这种现象当面给以批评。

这里必须说明，我近年来还是读到了许多好的新诗，象上边说的很坏的新诗当然不占重要地位。而且，苏东坡的评语本来是针对着中国的旧体诗来说的，他无法预见我们的新诗是什么样子，所以，我也还应该更多地从旧体诗词方面来观察这个问题。

那么，我们现在的旧体诗词水平如何呢？除了几位领导同志的作品以外，一般说来情况也很不妙。最突出的现象是有些人的旧体诗词往往不合格律。这就很成问题。而且，诗意也往往是很浅薄的。这就越发成问题了。按照苏东坡的评语，如果没有什么诗意，就连三分诗也不象了；再加上不合格律，当然很难读上口，那就连七分读都不可能了。这正如宋代的黄庭坚读王观复的诗，读不顺口，叹气说：“诗生硬，不谐律吕，此病自是读书未精博耳。”由此可见旧诗词是很讲究格律的。

也许有人认为旧诗词的格律，对思想的束缚太厉害了，必须打破它，创造符合于我们现代要求的新格律。这个主张我不反对，并且我同样主张要建立新的格律诗。但是，要不要建立新的格律，如何建立它，这是另外的问题。现在既然还没有新格律，而你又喜欢写旧诗词，在这样的情况下，我看还是老老实实按照旧格律比较好。因为旧格律毕竟有了长期的历史，经过了许多发展变化，成了定型。

这在一方面固然说明它已经凝固起来了，变成了死框框，终究要否定它自己。而在另一方面，它又证明作为一种格律本身，在一定程度上的确反映了人在咏叹抒情的时候声调变化的自然规律。你不按照这种规律，写的诗词就读不顺口。这总是事实吧！

当然，我这样说，并非企图充当旧格律的保护者；更不打算说服别人勉强都来接受旧格律。不是这样。我认为谁都可以自由地创造新的格律，但是，你最好不要采用旧的律诗、绝句和各种词牌。例如，你用了《滿江紅》的词牌，而又不是按照它的格律，那末，最好就另外起一个词牌的名字，如《滿江黒》或其他，以便与《滿江紅》相区别。